

とみや歴史散歩

其の八

「郷土の偉人 内ヶ崎作三郎 下巻」

情熱をかけて実現した愛国切手

政治家になった作三郎の政治活動として代表的なのが「愛国切手」の実現です。

旧制二高の先輩であった仙台出身の詩人土井晩翠の子息に英一がいました。英一は中学の頃から病弱で、高校を休学して転地療養することもありました。諸外国で郵便料に寄付金を付加して販売される慈善切手を日本にも導入して、ハンセン病や結核の患者の救済に役立てないかと、晩翠を通じて作三郎に働きかけます。

その博愛精神と熱心さに動かされた作三郎は、昭和8年の衆議院本会議において「慈善郵便切手発行二関スル建議案」を提出しました。当時の委員会において作三郎は、英一の名を出すことは控えつつ「或ル特殊ノ人ノ手ヲ通ジ」て調査したという海外事情の説明を細かい金額まで挙げて、慈善切手を詳しく紹介しており、自らの欧米留学の経験なども加え、具体的に答弁しています。この周到な調査は、通信省（現在の総務省・日本郵便など）の官僚たちを驚かせました。建議案は衆議院本会議で可決されますが、通信省は従業員の負担増などを理由に実行には至りませんでした。そこで作三郎は、昭和9年に目的を民間航空事業奨励という名目に切り替えた建議案を、帝国議会に提出しました。作三郎は趣旨説明の中で、提案者は英一であったことを明かしつつ熱心に答弁し、昭和10年に本会議で可決



東京帝国大学時代の作三郎

されました。今回は通信省も積極的に動き、昭和12年、愛国切手は実現しました。

この愛国切手は、日本における現在の寄付金付きはがきのルーツとなりました。英一の熱意に動かされた作三郎が諦めずに成し遂げるという、2人の愛国切手に対する情熱を感じます。

人情に熱かった作三郎

栗原郡金成村（現在の栗原市金成）生まれで労働運動家の鈴木文治は、同じ宮城県出身者であり大学の先輩であった作三郎の世話になっていきます。この2人の関係性を見ることが出来るエピソードを一つ紹介します。

文治が作三郎と同じ東京帝国大学（現在の東京大学）に進学したその年の冬、文治のもとに実家からはがきが届き、そこには、父親が病に倒れ生活がままならないと書かれていました。実家に戻ると家の中で母と弟妹が飢えと寒さで震えていたそうです。文治は、作三郎に状況と援助を求めると手紙を出しています。文治からの手紙を受け取った作三郎は、すぐに富谷の新町にある実家に連絡を取って、富谷から荷馬車で白米4斗、しょうゆ5升、炭5俵、まき3丸などの物資を届けたとされています。作三郎の父親である作太郎宛てに出した文治の手紙が、富谷宿観光交流ステーション「とみやど」整備の際の文化財調査で発見されています。その手紙には「この御恩は永代忘却仕る。身魂に徹して深く御礼申し上げる」と記されています。

愛国切手

キリスト教の教えの「隣人愛」を作三郎らの行動から見ることができ、人情に熱かった人柄がわかる話でもあります。

作三郎に関する貴重な資料を展示する「内ヶ崎作三郎記念館」を、とみやどに整備しています。来春に開館しますので、ぜひ作三郎について学びに訪れてください。

（執筆：富谷市民俗ギャラリー学芸員 清水勇希）

